保育者養成における音楽的専門性の育成に関する研究
── 幼稚園教員及び学生への質問紙調査を手掛かりに ──

山 本　真 紀・渡 辺　厚 美

Study on Development of Musical Expertise in Nurturing Nursery Teachers: Using a Questionnaire Survey for Students as a Hint

Maki Yamamoto and Atumi Watanabe

要　旨

本論文は、筆者らが勤務する大学の学生を対象に実施した質問紙調査の結果を基に、学生が実際に保育現場で求められる音楽的専門性を、どれほど理解した上で日頃のピアノ演奏や弾き歌いに取り組めているのか認識の程度を明らかにし、さらにそれを現場の保育者の見解と比較することで、今後の授業を展開していく上での示唆を得ようとするものである。質問紙調査からは、現場の保育者以上に今の学生たちが保育者としての音楽的専門性に対し概ね高い意識をもっていることが明らかとなった。しかしながら双方の見解の相違点を考慮すると、今後の授業改善に役立つ一つの課題が見えてきた。それは様々なピアノ演奏が、劇遊びや身体表現等のどのような保育場面で活用されるのかを具体的に想像させるということである。教員は日々の授業において一曲一曲に取り組ませる際、学生が常に実際の保育の様々な場面、及びそこでの子どもたちの姿を想像するよう指導していかなければならない。

キーワード：保育者養成、音楽的専門性、ピアノ演奏、場面の想像

はじめに

保育者を養成する多くの大学や短期大学では、「音楽」、「幼児音楽」、「音楽の基礎」、「音楽演習（基礎）」、「器楽演奏（基礎）」、「音楽（子どもと遊ぶ）」等の名称で音楽実技に関わる科目が設置され、弾き歌いを含むピアノの演奏技能を高める指導がなされている。

筆者らの勤務校（以下、T 大学とする）においても、必修か選択かという履修区分の違いはあるものの、「音楽実技」という名の科目が設けられ、1 年生から 4 年生まで受講することができる。すなわち最大で 4 年間、徹底してピアノを中心とした音楽的専門性を身に付けることが可能なのである。しかしながら、果たして学生たちが保育者養成における音楽的専門性について、どのように考え、理解しているのかというと、それは定かでない。当然ながら、日々の授業において、子どもをイメージした演奏を心掛けることや、理想的保育者像について考えながら演奏するよう指導はしているが、とりわけ実習にまだ行ったことのない 1・2 年生の学生たちが、保育の「現場」を想定

した演奏表現がどこまでできているのかというと不明である。

そこで筆者らは、「音楽実技」を担当する立場として、現場で求められる音楽的専門性を学生がどの程度理解した上で、日頃のピアノ演奏や弾き歌いに取り組めているのかを明らかにするため、過去に幼稚園教員を対象に行われたピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査をＴ大学の１・２年生にも実施し、実情を把握したいと考えた。そして、現場で実際に求められている音楽的専門性と、今の学生のそれに対する認識の差を測り、授業を展開する上での示唆を得たいと考えた。

以下では、まずＴ大学の「音楽実技」のカリキュラムを説明し、また音楽的専門性に関して過去の研究を踏まえ整理する。次に質問紙調査の概要を述べて、Ｔ大学学生の調査結果について考察を交え示していく。そして、その結果を過去に行われた幼稚園教員の結果と比較させ、今回の調査結果全体から見えてくることを述べる。

1.「音楽実技」のカリキュラム

先述したように、私立Ｔ大学において、「音楽実技」という科目は１年生から４年生まで受講することが可能である。学年により、「音楽実技Ⅰ」、「音楽実技Ⅱ」、「音楽実技Ⅲ」、「音楽実技Ⅳ」と分かれており、さらに「音楽実技ⅠA」、「音楽実技ⅠB」というように、前期後期で分割されている。ここではシラバスに則り、１年生の必修科目である「音楽実技ⅠA・ⅠB」、そして選択必修科目ではあるが、大半の２年生が履修する「音楽実技ⅡA・ⅡB」を中心に見ていく。

シラバスにはまず、「授業のテーマと目標」が提示され、次に全15回の「授業内容と計画」が示されている。ここでは、個々の授業の細かい内容を掘り下げるのではなく、「音楽実技」という科目のテーマと、それぞれの学期における目標を中心に述べる。

「音楽実技」全体に共通した授業テーマとして、「保育者・教育者に必要な音楽実技の知識・技能を習得」ということが掲げられている。目標としては、「音楽実技ⅠA」では、ピアノ初習者向けの教則本「バイエル」に収められた曲や幼稚園・保育園で日々歌われるあいさつの歌、小学校歌唱共通教材を中心に扱うこと、「音楽実技ⅠB」では、それに加えて、音楽の基本的な理論、和音に関する理論を学ぶとされている。「音楽実技ⅡA」では、楽譜を読み解いて分析（アナリーゼ）したり、それぞれの学生の技術に応じて楽曲をアレンジしたりすること、「音楽実技ⅡB」では、コードネームや和音記号、わらべうた等の日本の民族音楽の理論について学ぶことが示されている。

「音楽実技ⅠA」から「音楽実技ⅡB」へとレパートリーを増やしていくだけでなく、音楽理論を学ぶことにより、一つの楽曲をより深く理解し、様々な形で演奏することができるようになる内容となっている。

2. 保育現場で求められている音楽的専門性

音楽的専門性に関する研究は、これまでにも数多く行われてきた。例えば、澤田まゆみ（2013）は幼稚園教諭に求められる「ピアノ・スキル」を、先行研究や保育士試験等の現状、保育における子供の活動の中から考察し、８つにまとめている。概要を説明すると、それらは楽曲を前提としないものとするものとに大別され、前者の場合には、子どもや保育者自らの声や動き、イメージや心の動きをピアノで「表現する力」が必要と示されている。一方、後者の場合には、楽譜や子どもの姿から読みとり感じとったものを、「演奏に活かす力」や「自由でより豊かな伴奏をする力」が必要と示されている。また自らの演奏技術、楽器学的な視点等を、「子どもたちの発達に沿って用いる力」も必要と示され、さらには曲のジャンル、レパートリーの「演奏の幅を拡げる力」も必要と示されている。いずれも子ども中心の発想に立っているが、ここで求められている演奏技能は、ピアノを自在に操り、なおかつ子どもの感情を音楽で表現できる力であり、かなり高度な技能

が要求されている。

また養成校へのアンケート調査を基に、保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題を捉えた宮脇長谷子（2001）は、保育者に必要とされるピアノに関する「音楽的能力」を、「古典的なドイツの教材が正確に弾けることではなく（指が回る事でもない）、幼児一人一人を見守りながら弾き歌いをし、幼児の音域に合わせて、時には移調ができて、更に身体表現においては、その動きに合わせて即興的に演奏できることである」と明示している。宮脇は、幼児の好む歌唱教材にみられる音楽的特徴（運指・コード・リズム）が少ない、限られた時間内でマスターするには無駄が多い、という理由でバイエル教本を授業内で活用することを否定し、コード学習を推進する立場にあるが、上述の移調奏や即興演奏をするためには、相当なピアノの技能が必要である。

こうした高い演奏技能を要求するもの、すなわち保育者に必要とされる「演奏技術の面」を明らかにする研究がある一方、保育者としての「内面の育成」を重視した研究も見られる。例えば、保育者としての専門性を音楽的視点から検討した阪井恵・奥村正子・小畑千尋・嶋田由美・今川恭子（2004）は、「保育者養成の場合、（中略）音楽に関する知識より、子どもに対する視点を育てることがずっと重要［傍点筆者］」と明言している。この発言の背景には、幼稚園等の採用試験を見据えたバイエル教本学習への疑義がある。加えて、ピアノの腕前が音楽力の指標となっていることへの問題提起がある。阪井らは、「声だけで保育できたら、一番良い保育者」という発想からピアノよりも先に「声」を考える重要性を訴え、さらには実態を把握するという考えから、子どもを見る視点の大切さを指摘している。

この他にも保育者としての姿勢に重きを置いた発言は見られ、やや遡ってのものになるが、杉山知子（1980）は、「保育者に必要なものは子どもたちの歌をより楽しいものにしていく感受性と技術であって、むずかしい伴奏を止まったり、間違ったりしながら弾くことより、簡単な伴奏でも余裕をもって音楽的に弾くことの方が、当然のことながら、音楽教育上望ましい」と述べ、子ども主体で考え、伴奏に取り組むことを勧める発言をしている。

ピアノの演奏技術向上を優先させるのか、保育者としての要素、すなわち子どもを中心とする発想を優先させるのか、バイエル教本の有り様とも関わって研究の傾向が分かれるところであるが、幼稚園教諭に求められる音楽的資質を、現場の幼稚園教諭の意見と学生の意見を比較して調査した羽根田真弓（2004）は、保育現場で求められる「音楽的資質」を、「うたうこと、歌遊び・手遊びの実践力、リズム・身体表現力およびピアノ演奏技術取得などの専門的な実践力」と二分して表現している。

また、保育者養成校におけるピアノ教育の問題点及び改善法を研究した新海節（2012）は、「保育における音楽」を検討する際、「音楽教育的視点」と「保育的視点」という用語で区別して論じている。そして「子どもたちの豊かな音楽的環境となるためには、子どもたちの感性に訴えかけることのできるような演奏表現技術が必要であろう。表面的な技術のみを養うことを目的とするのではなく、演奏表現を通して音楽を楽しむ人間性や学生自身の音楽性、音楽による感情表現を養うことが必要である」と述べ、演奏技術を向上させること以上に、自らが音楽を心から楽しむことのできるような感性を磨くことを推進している。加えて、保育者養成校で抱える問題点として、「『就職や現場からの要求』を意識しすぎて、ピアノ学習の効率化を目指す傾向に偏り、結果として学生のピアノ演奏が音楽的感情を伴わない表面的・機械的な演奏になってしまう危険性がある」と言及し、技術一辺倒になることを危惧している。

このように様々な見解を追っていくと、「音楽的専門性」と一言で表してみても、その詳細は多様であることがわかる。しかしながら、各発言の底流にあるのは、ピアノの演奏技術向上と、子ど

もを中心に考える発想をどのように織り交ぜていくべきかということであり、つまり保育者としての音楽的専門性とは、まさにこの二つの側面をバランスよく取り入れ融合したものといえる。以下で取り上げる質問紙の原案に関わる坂田直子・山根直人・伊藤誠（2009）は、「保育者としての音楽的専門性」を、「単なる楽曲の演奏技能だけにとどまらず、これらの技能を用いて、保育の場で実践的にどう使うか、すなわち子どもへの援助や指導方法の中でいかに生かすかということをも含め、保育のために必要な能力と考える」と整理して述べているが、それは換言するならば、「子どもの心情に寄り添ったピアノ演奏技術」といえるであろう。

「保育者としての音楽的専門性」、すなわち「子どもの心情に寄り添ったピアノ演奏技術」について、今の学生たちはどのように受け止めているのか、その内実を明らかにしていこう。

3. 質問紙調査の概要

坂田他（2009）は、2008年2月～3月に東京都及び埼玉県内の私立・公立幼稚園に勤務する教師180名を対象に質問紙調査を実施した。その内容は、1)保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能について、2)保育の際に必要と考えられる指導方法について、3)ピアノの弾き歌いについてどのような点に難しさを感じたことがあるかについて、4)歌の伴奏をしなければならないとき、伴奏の楽譜が難しく感じられるものだった場合どのようにするかについて等多岐に渡っている。

以上の調査中、保育者としての音楽的専門性の育成に深く関わる内容は、1)保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についてである。本研究ではここに着目し、学生を対象に質問紙調査を実施することとする。坂田他（2009）の調査結果では、レパートリー、弾き歌いの技能の必要性とともに、身体的な表現の援助、劇やお話の援助としてのピアノ演奏の必要性等が示されているが、まずは、学生の調査結果を分析し、次に幼稚園教員を対象とした坂田他（2009）の調査結果と比較することとする。

(1) 目　的

現場の保育者と学生との「保育者としての音楽的専門性」に対する認識の違いを明らかにし、今後の指導につなげる。

(2) 対　象

対象としたのは、筆者らが兼任で勤務する私立T大学こども保育・教育専攻の1学年と2学年の学生である。1年生179名、2年生107名から回答が得られた。

(3) 実施時期

調査は2018年7月下旬に実施した。この時点で前期の授業は終了していた。

(4) 質問項目

質問項目は、以下の図1に示した保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についての12項目である。

1. 保育者自身の歌い方や声の表現技法
2. 子どもの歌の表現に関する知識
3. 子どもの音楽発達に関する知識
4. 子どもが歌う歌のレパートリー
5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識
6. 保育者の弾き歌いの技能
7. 子どもの身体的な表現を援助するピアノの演奏技能
8. 劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能
9. 登園時など生活のなかの歌のレパートリー
10. 音楽に関する理論
11. 合奏曲などの編曲の知識
12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能

図1　保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についての質問項目

この12項目は、「保育の中で子どもの表現や音楽活動を援助する際に必要と思われる音楽的な知

識・技能に関する」項目として、坂田他（2009）が作成したものをそのまま用いた。その理由は、T大学の学生と幼稚園教員との音楽的専門性に対する認識の違いを明確にし、今後の授業展開に結び付けるためである。

この12項目に、「必要である」「やや必要である」「どちらでもない」「あまり必要でない」「必要でない」の5段階で回答を得た。

4. 調査結果と考察

⑴ T大学1年生と2年生の調査結果と考察

1年生、2年生の調査結果を図2（1年生）及び図3（2年生）に示す。これらの図は、項目ごとの結果から、「必要」のパーセンテージが高かった順に並べたものである（図2、図3参照）。

以上の結果について、まず、「必要」という回答が多かった項目を見ていく。表1は、1・2年生が「必要」と回答した上位6項目である（表1参照）。

1・2年生どちらも、「手遊び歌や遊び歌に対する知識」を「必要」とする回答が最も多かった。また、1年生にあるが2年生に無い項目は、「子どもの歌の表現に関する知識」である。そして、2年生にあるが1年生に無い項目は、「保育者自身の歌い方や声の表現方法」である。

また、1年生では、「子どもの歌の表現に関する知識」と「子どもの音楽的発達に関する知識」という、子どもに関する知識が上位を占め、レパートリーに関する項目がそれに続いている。一方、2年生ではレパートリーに関する、「登園時

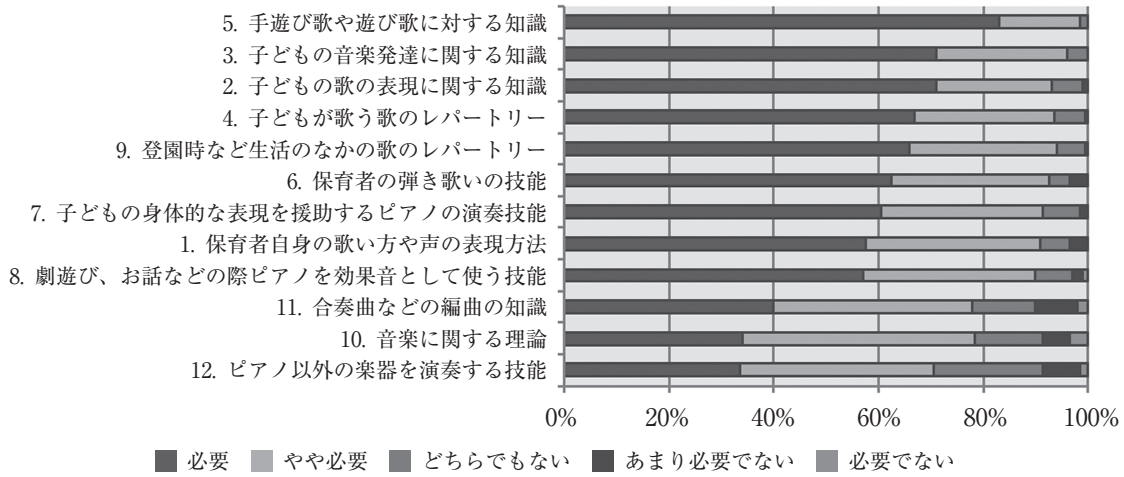

図2　保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する質問（1年生）

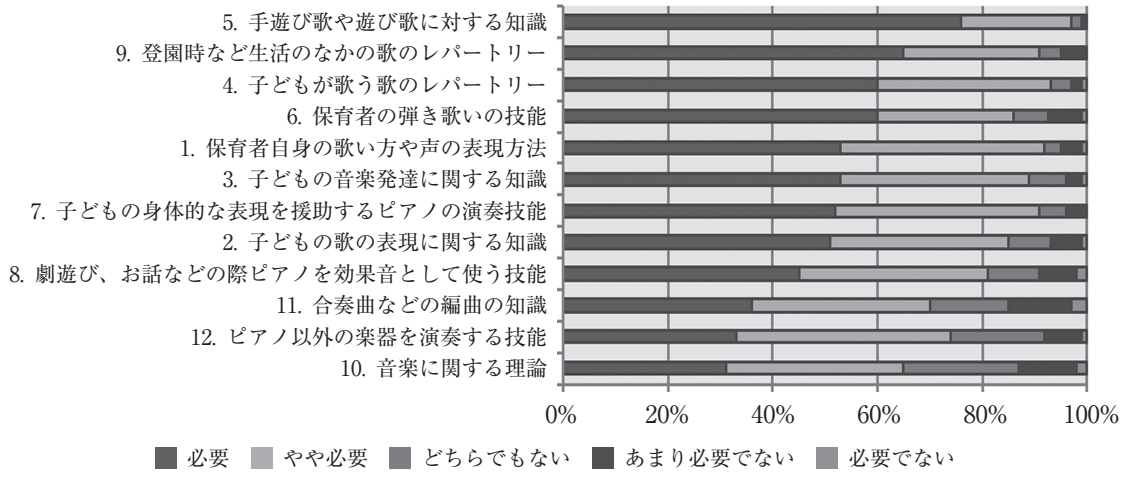

図3　保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する質問（2年生）

表１　１・２年生が「必要」と回答した上位６項目

順位	１年生	順位	２年生
１位	手遊び歌や遊び歌に対する知識（83%）	１位	手遊び歌や遊び歌に対する知識（76%）
２位	子どもの音楽発達に関する知識（71%）	２位	登園時など生活のなかの歌のレパートリー（65%）
	子どもの歌の表現に関する知識（71%）	３位	子どもが歌う歌のレパートリー（60%）
４位	子どもが歌う歌のレパートリー（67%）		保育者の弾き歌いの技能（60%）
５位	登園時など生活のなかの歌のレパートリー（66%）	５位	保育者自身の歌い方や声の表現方法（53%）
６位	保育者の弾き歌いの技能（62.5%）		子どもの音楽発達に関する知識（53%）

など生活のなかの歌のレパートリー」と「子どもが歌う歌のレパートリー」が上位を占め、技能や表現方法に関する項目がそれに続いている。１年生は、まずは子どもに関する知識を深めようという傾向にあり、２年生はレパートリーを増やそうという傾向が見られる。

それでは、「必要」という回答が少なかった項目は、どうであろうか。表２は、１・２年生が「必要」と回答した下位３項目である（表２参照）。

「必要」という回答が少なかった下位３項目は、１・２年生で順位は入れ替わっているが、「合奏曲などの編曲の知識」、「音楽に関する理論」、「ピアノ以外の楽器を演奏する技能」である。この３項目は、いずれも授業で単独で取り上げる機会が少ない事柄である。初歩の編曲法を合奏に応用したり、音楽に関する理論として基礎的な読譜や形式、奏法等に関する内容を取り上げたりはしている。しかしこれらは、学生が実際に曲を演奏するときには、独立した課題というよりも曲に付随した内容として捉えられている。このようなことから必要性が下位となっているといえる。

表２　１・２年生が「必要」と回答した下位３項目

順位	１年生	２年生
10位	合奏曲などの編曲の知識（40%）	合奏曲などの編曲の知識（36%）
11位	音楽に関する理論（34%）	ピアノ以外の楽器を演奏する技能（33%）
12位	ピアノ以外の楽器を演奏する技能（33.5%）	音楽に関する理論（31覧）

また、ピアノ以外の楽器、例えばギターやアコーディオン等については、移動しながら演奏できる、屋外に持ち出すことができる等の利点を伝えてはいるが、授業内で実際に演奏することはあまり無いため、「必要」という回答が少なかったと考えられる。

ここまで述べてきた１・２年生の調査結果からは、学生の音楽的専門性認識には授業内容が大きく影響しているということが推察される。４月に入学した１年生は、「乳幼児心理学」等様々な科目で子どもについて学び始める。「音楽実技」を学ぶ上でも、まず、子どもの歌の表現に関する知識や、子どもの音楽的発達について理解を深めることから取り組もうとしている。このことから、子どもの歌の表現や音楽的発達の知識に関する項目が上位を占めているといえる。

一方、２年生にはこれまでの学びと経験がある。授業では、子どもの歌のレパートリーを多く持つこと、幼稚園や保育所で歌われている「生活のなかの歌」を演奏できるようになることが必須の課題として提示されている。しかし、それは容易なことではない。２年生は、その難しさも経験してきている。まさに、２年生はレパートリーを増やし、技能を高めなくてはという必要性に直面している。レパートリーに関する項目が「必要」の回答で上位を占め、それに技能や表現方法に関する項目が続くのは、このような理由からといえる。

保育者の音楽的専門性として学生は、自らが授業内で直面している課題については必要性を高く、授業内で触れられることが少ない課題につい

ては必要性を低く回答しているように見受けられる。

⑵　幼稚園教員との比較

幼稚園教員の調査結果を図４に、１・２年生の結果を合計したものを図５に示す。この幼稚園教員の調査結果は、坂田他（2009）が東京都及び埼玉県内の私立及び公立幼稚園の教員110名の回答をまとめたものを解像度は低いが再構成せずにそのまま掲載する。これらの図は、項目ごとのデータから、「必要」「やや必要」の回答を合計し、そのパーセンテージが高い順に並べたものである。

幼稚園教員への調査結果では、７項目で「必要」の回答が40％を割っている。一方、１・２年生の結果で「必要」が40％を割っているのは３項目だけである。「必要」と「やや必要」の回答を合計しても、パーセンテージは１・２年生の方が高い。このことからは、「音楽的専門性」に関する意識について、幼稚園教員の方が学生よりも低いように見受けられるが、彼らの経験や環境を鑑みると一概に意識が低いと言い切ることはできない。幼稚園教員は、経験だけでなく、勤務する幼稚園の教育方針や教育内容等、彼らを取り巻く環境からも必要性を判断している可能性が拭えないからである。

次に、「必要」と「やや必要」を合計した上位

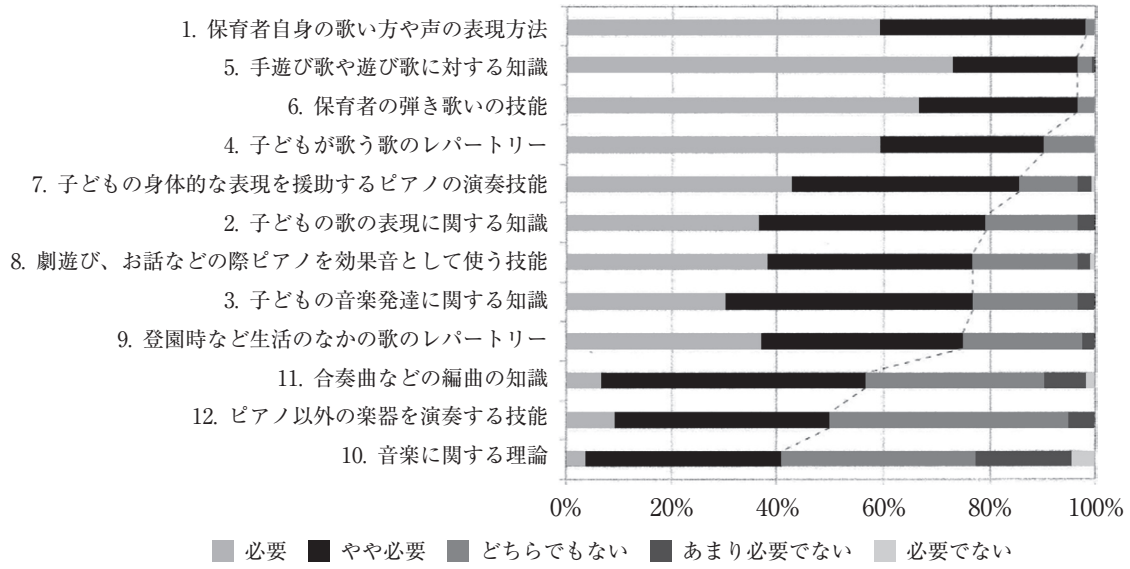

図４　保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する質問（幼稚園教員）

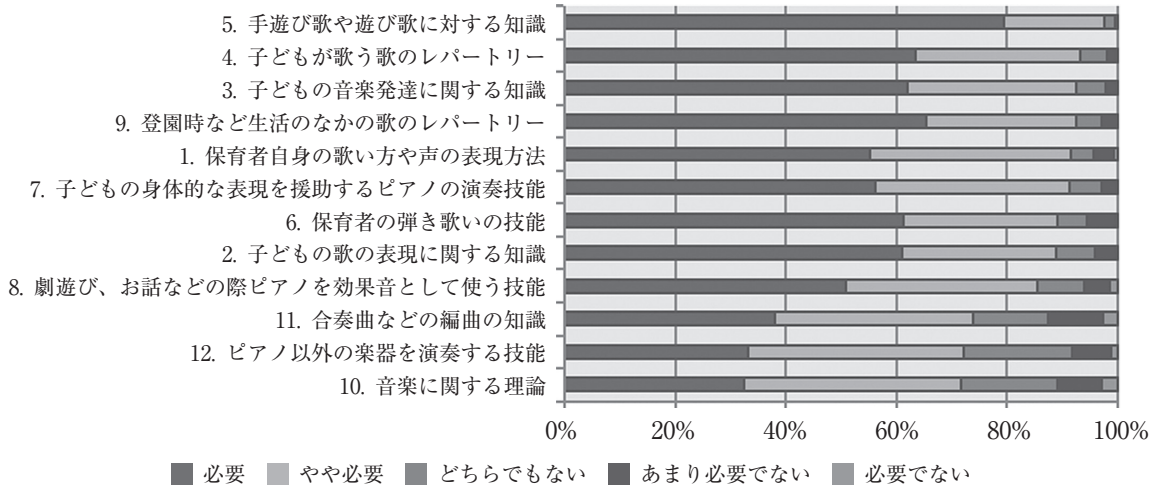

図５　保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する質問（１・２年生）

3項目を見ていく。「手遊び歌や遊び歌に対する知識」が幼稚園教員では2位、1・2年生の合計では1位である。幼稚園教員では「保育者自身の歌い方や声の表現技術」が1位、「保育者の弾き歌いの技能」が3位となっている。1・2年生では「子どもが歌う歌のレパートリー」が2位、「子どもの音楽発達に関する知識」が3位になっている。幼稚園教員は、既に子どもの音楽的発達の知識やある程度のレパートリーを持っているが、日々の保育の中で技術的なことに必要性を強く感じている。一方、1・2年生は、まずは子どもの発達を理解し、レパートリーを増やすという段階といえよう。

さらに、「必要」と回答されたパーセンテージが高いものを見ていく。表3は、幼稚園教員と1・2年生の「必要」という回答の上位6項目である。

幼稚園教員と1・2年生に共通して必要性が上位を占めているのは、「手遊び歌や遊び歌に対する知識」、「保育者の弾き歌いの技能」、「子どもが歌う歌のレパートリー」である。幼稚園教員の3位「保育者自身の歌い方や声の表現方法」、5位「子どもの身体的な表現を援助するピアノの演奏技能」、6位「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能」は、1・2年生の上位には入っていない。1・2年生では、「登園時など生活のなかの歌のレパートリー」が2位、「子どもの音楽発達に関する知識」が4位、「子どもの歌の表現に関する知識」が5位を占めている。ここでも、1・2年生のデータからは、レパートリーと知識を学ぶことを重視している傾向が見られる。一方、幼稚園教員が1・2年生よりも必要性を強く感じている「保育者自身の歌い方や声の表現方法」、「子どもの身体的な表現を援助するピアノの演奏技能」、「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能」は、幼稚園の様々な活動のなかでの音楽、その場面場面における子どもたち一人一人の姿を念頭に置いた上での音楽的専門性であるといえる。レパートリーとして練習した曲をいつも同じように演奏するだけではなく、場面に応じて即興的にアレンジする能力も必要とされていると考えられる。

レパートリーを多く持つことや子どもに関する知識を深めることは、保育者の音楽的専門性として必須である。しかし、これまでレパートリーを増やすために、弾き歌い中心の授業になってはいなかったか、再考する必要があろう。保育の場では、身体表現、劇、読み聞かせ等のお話の援助にもピアノが演奏される。保育者養成における音楽的専門性の育成には、このような視点からも、授業内容を検討することが重要といえる。

「必要」と回答したパーセンテージが低かった3項目は、幼稚園教員と1・2年生どちらも全く同じで、「合奏曲などの編曲の知識」、「ピアノ以外の楽器を演奏する技能」、「音楽に関する理論」である。1・2年生については先述したが、幼稚園教員については、幼稚園の教育方針や教育内容が影響していると考えられる。合奏に既製の楽譜を使っていたり、備品として楽器が揃っていなかったりということもあろう。

表3　幼稚園教員と1・2年生が「必要」と回答した上位6項目

順位	幼雄園教員	順位	1・2年生
1位	手遊び歌や遊び歌に対する知識（72.7%）	1位	手遊び歌や遊び歌に対する知識（79.5%）
2位	保育者の弾き歌いの技能（66.4%）	2位	登園時など生活のなかの歌のレパートリー（65.5%）
3位	保育者自身の歌い方や声の表現方法（59.1%）	3位	子どもが歌う歌のレパートリー（63.5%）
	子どもが歌う歌のレパートリー（59.1%）	4位	子どもの音楽発達に関する知識（62%）
5位	子どもの身体的な表現を援助するピアノの演奏技能（42.7%）	5位	保育者の弾き歌いの技能（61.25%）
6位	劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能（38.2%）	6位	子どもの歌の表現に関する知識（61%）

⑶ 調査結果から見えてくるもの

ここまで、1・2年生、幼稚園教員への調査結果を見てきて、音楽的専門性の認識には、経験や環境、直面している課題、そして授業内容が影響していることが明らかになった。音楽的専門性の育成には、広く音楽的専門性について見渡しつつ、何を課題として提示するのか、それをどのように指導していくのかを精査し、実施することが重要といえる。

また、保育の場では、身体表現、劇、お話の援助にもピアノが演奏される。学生には、保育の様々な場における子どもの姿をより具体的にイメージさせ、それに合わせた多様なピアノ演奏を即興的にアレンジして演奏できるよう指導していく必要がある。そのための第一歩としては、簡単なカデンツを様々なリズムパターンで演奏できるようにする、お話の内容に合わせて長調の曲を短調に移旋する、また、弾き歌いの曲にしても、伴奏パターンや音域、テンポ、前奏等を変化させるアレンジの力を身につけさせる等考えられる。しかし、それらが単なるアレンジのテクニックに終始するのではなく、子どもたちと一緒の空間で音楽を共有していくという方向性の中でなされることが重要である。そのためにはやはり、つねに子どもの姿をより具体的に想像しながら取り組むことが望まれる。

おわりに

認識の違いとして今回の比較から明らかになったことは、現場の保育者が答えた以上に、T大学の学生は保育者としての音楽的専門性に対し、高い意識をもっているということである。教える側としては、大変良い傾向にあると受け止められる。しかしながら、現場の保育者の解答を踏まえ、それを今後の授業の改善に役立てようとするならば、一つの課題が見えてくる。それは、様々なピアノ演奏が、劇遊びや身体表現等のどのような保育場面で活用されるのかを具体的に想像させるということである。したがって、筆者らは、日々の授業において、一曲一曲に取り組ませる際、つねに実際の保育の様々な場面、及びそこでの子どもたちの姿を想像するよう指導していかなければならないと考える。同じ曲を演奏するにあたっても、教室内で演奏する場合とホールや運動場等の大きな空間で演奏する場合とでは、子どもたちにさせる身体表現の方法も、テンポや音域等ピアノ伴奏に関連するアレンジ方法も異なり、表現の幅は自ずと拡がっていく。こうしたことに気づかせながら、演奏方法を学ばせていく必要がある。

具体的な場面の想像を経て表現の幅が拡がっていくことは、音楽を深く読み取れることにも通じ、また音楽のもつ可能性を実感できることは、音楽に触れる喜びを味わうことにもつながるであろう。

引用・参考文献

澤田まゆみ（2013）「保育士・幼稚園教諭に求められるピアノ・スキルとは何か」『新島学園短期大学紀要』33: 57-66.

宮脇長谷子（2001）「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題 ── 養成校へのアンケート調査を通して ──」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』（15-W）: 1-11.

阪井恵・奥村正子・小畑千尋・嶋田由美・今川恭子（2004）保育者養成座談会「保育者としての専門性のために音楽的な視点から育成すべき力とは」『音楽教育実践ジャーナル』1(2): 38-44.

杉山知子（1980）「幼児歌曲の伴奏に関する一考察(2)」『美作女子大学・美作女子短期大学部要』（25）: 21-30.

羽根田真弓（2004）「幼稚園教諭に求められる音楽的資質 ── 保育現場と学生の比較調査をもとに ──」『鳥取短期大学研究紀要』49: 17-30.

新海節（2012）「保育者養成校におけるピアノ教育」『藤女子大学紀要　第Ⅱ部』49: 147-153.

坂田直子・山根直人・伊藤誠（2009）「保育者養成における音楽的専門性の育成 ── 幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりに ──」『埼玉大学紀要 教育学部』58(1): 15-30.

（やまもと　まき）東京未来大学
（わたなべ　あつみ）東京未来大学